はじめに

今年度の在籍は、5 月現在 1 年 48 名、2 年 42 名、3 年 36 名の合計 126 名であった。このうち 65%にあたる 81 名が中学校時代に不登校を経験している。年間 30 日以上の欠席があり、病気や経済的な理由ではない場合を「不登校」として定義しているが、この不登校に含まれない生徒の中には、登校できていても教室には入れず、保健室や相談室を居場所としていたり、校外の中間教室に通室していた生徒もいる。このような生徒も含めると、今年度は 80%近い生徒が中学校において、普通に登校できていなかったことになる。さらに、特別支援学級に在籍していた生徒を含めると 90%近い生徒が、集団に対する不適応を持っていたり、発達障害があったり、学習に大きな不安を持っていたりということになる。中学校時代、安心して安定した生活を送ることができていた生徒は本当にわずかということになる。

このような生徒たちではあるが、ポテンシャルが高く豊かな発想力を持っている生徒が多いことも、本校の生徒たちの特徴である。生徒たちは、徐々に自分の居場所を見いだし、集団との関わりの中で秘めていた力を発揮し始めていく。

体験学習や中高連絡会の際、大勢の中学生や保護者、中学校の先生方を前にしても不登校だった中学校時代のことを何のためらいもなく発表することができたり、文化祭ではダンスや裏ミスなどの発表に進んで参加したり、ファッションショーで堂々と演技したり歩くことができたり、生徒たちのパフォーマンスには驚かされることが多々ある。そこに無限の可能性を感ずるのである。

すべてがすべてこのような生徒たちばかりではないが、この生徒たちの持っている可能性を引き出し、伸ばしてやる環境づくりこそが私たちの最大の使命であると考え、日々の教育実践に取り組んでいる。

３年間、文科省委託事業として実践してきた「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」において、地域の方々や様々な職種の企業の方々と多くの出会いがあり、出前授業を行っていただいたり、キャリア教育の一環として自らの体験を語っていただくなど、働く意義についてのお話を聴ける機会を多く設けていただいたことは、生徒たちの積極性や自主性を触発する貴重な機会となった。

今年度、生徒たちが自らの可能性を伸ばすために挑戦してきた実践をまとめてみた。これらの実践を土台として、これからも一人でも多くの生徒が、自らの可能性を見出し伸ばすことができる機会を設けられるよう工夫していきたいという思いを新たにした。

令和 3 年 1 月
学校法人豊野学園豊野高等専修学校

可能性への挑戦プロジェクト　第1弾　～トートバッグ作り～

学校法人豊野学園豊野高等専修学校　奥田孝志

1　プロジェクトスタートの経緯

主体的に考え、主体的に行動できる生徒を育てたいという本校の願いの具現化に向けて、長野市にある株式会社北信帆布の福島一郎社長から「ぜひ協力したい」という申し出があった。

福島社長には、今年度3年目（最終年度）を迎えた文科省委託事業である「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」における産官学連携キャリア委員会の一員として、企業の立場からキャリア教育に関わって助言をいただいてきた。特に、職場体験を実施する2学年に対して職場体験の心構えや受け入れる企業の立場から職場体験のポイントについてお話をしていただいたり、実際に職場体験を受けていただくなど、生徒と触れあう機会を通して様々な助言をいただいてきている。

このような関係の中から、福島社長より「弊社のテント生地などの材料を提供するので、トートバッグを生徒たちがデザインし、製作し、販売するという活動をしてみませんか」という提案をいただいた。この福島社長からの提案を生徒の自主性・主体性を育てる絶好のチャンスと捉えて前向きに受け止め、実践に向けてさっそく関係者による打ち合せを行い、次のことを確認した。

■材料など製作に必要な物は、北信帆布さんに準備していただく
■参加生徒は、１・２年生から公募する
■職員は、生徒の考えや思いを大切にし、全面的にバックアップする
■見通しを持てるように活動日・活動時間・活動場所を明確にする
■大まかなスケジュールは、３月までに製作し、４月からの販売をめざす
■利益が出た場合、材料費は北信帆布へ払う

なお、この打ち合せには、デザイナーである塩尻市在住の三溝さんも出席し、トータルコーディネーターをお願いすることも決まった。活動日は原則月曜日、活動時間は午後3：30～5：00までとして、場所は、専門課程服飾室をお借りすることを決めた。

2　プロジェクトのねらい

本年度の学校教育目標を「可能性への挑戦～人とつながり自分らしく生きる～」として令和2年度がスタートした。生徒会活動、部活動、ボランティア活動など様々な活動を通して、生徒たちが持っている可能性を伸ばしたいという願いでスタートしたが、新型コロナウイルスの関係で計画していた活動が思うように実践できない状況が続き、フラストレーションを感ずる生徒も多かった。特に、昨年の台風19号による水害被害をきっかけにして立ち上げたボランティア委員会の活動は、人との接触を制限されてしまった今年はほとんど活動できない状況で、地域貢献や地域とのつながりを楽しみにしていた生徒たちの落胆ぶりは大きかった。

本校の生徒たちの特徴として、中学校時代、学校に思うように通えなかったり、大きな集団が苦手だったり、人との関わりが苦手だったり、自分に自信を持てなかったりする生徒が多い。しかし、入学後の生徒たちの様子を見ると、体験学習で来校した中学生や保護者の皆さんの前で、自分の中学校時代の様子を堂々と本音で話すことができたり、文化祭ではダンスや裏ミスなど多くの生徒の前で発表したい生徒が多かったり、生徒会の役員決めでも積極的に立候補する生徒が多かったりと、生徒たちが持っている「関わりたい」「繋がりたい」という意識の強さや、持

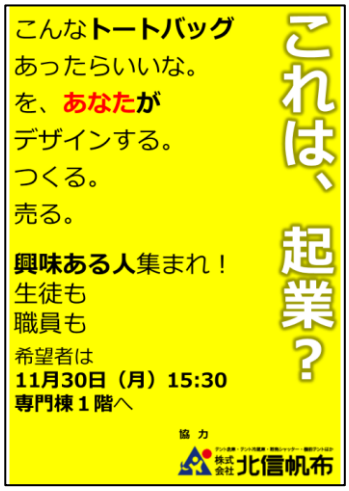
っている潜在能力の高さには驚かされる場面が多いことも事実である。そこで、このような生徒たちが持っている無限の可能性を伸ばせる機会を設け、挑戦していこうとする校風を醸成していくのが私たちの使命だと考え、前述した学校教育目標をグランドデザインに掲げ、日々の教育活動を実践している。「トートバック作り」は、この学校教育目標に迫る活動としてスタートしたのである。

3　プロジェクトの経過

（1）参加生徒の募集

全校を集めることが出来ない状況の中でどのように今回のプロジェクトを生徒に周知して希望者を募るかを検討した結果、まず、右のポスターを作成して各教室に掲示して周知を図った。

そして、担当職員が各教室を回り、活動のねらいや概要を説明し興味関心を持った生徒は、ガイダンスに参加するように呼び掛けた。



（2）ガイダンスを開催

11 月 30 日（月）15：30 より「可能性への挑戦プロジェクトトートバッグづくり」についてのガイダンスを実施した。集まった生徒は1年生が 7 名、2 年が 4 名の計 11 名。担当職員より、今回のプロジェクトについて次のように説明した。

❶ プロジェクト名は「可能性への挑戦プロジェクト」
❷ ねらいは「主体的に考え、主体的に考える生徒をめざす」☞「生徒が主人公」「生徒が主役」
❸ 活動内容は３つ　・自らデザインし　・自らで製作し　・自らで販売する
❹ 失敗してもＯＫ。失敗の原因を探し、再び挑戦できる
❺ 活動のスケジュールの概要　☞3 月中にバッグの完成をめざし、4 月から販売をめざす

説明に続いて、このプロジェクトに協力していただけるスタッフを紹介。北信頒布の福島社長からは、このトートバッグづくりに対する思いを熱く語っていただいた。

デザイナーとして関わっていただく三溝さんからは、これまで携わってきた経験とまず最初に取り組むべき最も大事なことは「どのようなバッグにしたいのかいうコンセプトを決めることです」というアドバイスをいただき、コンセプトに対してそれぞれの思いなどを意見交換してガイダンスを終えた。

（3）コンセプト決め①

12 月 7 日（月）、2 回目のミーティングを開催。

今回の活動テーマは「コンセプトを決める」であった。前回に続きデザイナーの三溝さんに同席していただき、アドバイスをしていただきながらコンセプトを決めるための話し合いを始めた。コンセプトを決めるにあたって、まず「コンセプトとは何か」ということを共通理解した。本

プロジェクトでは『「なぜこのバッグを作ったのですか？」という問いに対する答えをメインコンセプトとする』ということを共有した。

話し合いを始める前は、意見が出るのだろうか、話し合いになるのだろうか、決められるのだろうか、という不安もあったが、驚くことに生徒たちからは次から次へと前向きな意見が出された。

- 地球温暖化を防いで、プラスチックゴミ削減をめざしたエコバッグ
- 本校らしさというか、本校の特色が伝わるようなバッグ
- 和風テイストなバッグ
- 機能性の高いバッグ
- エコバッグっていってもテント生地で作るのだから折りたためるのだろうか
- 小学生に使ってもらいたいから図書袋のようなバッグ
- お年寄りの方が買い物しやすいようなバッグ
- ターゲットは定めずに、幅広い人たちに買ってもらえるバッグ

真剣にそして自由に発言できる雰囲気の中で話し合いが進められた。その結果、メインコンセプトを次の二つに絞って考えていくという方向でまとまった。

■地球温暖化を防ぎ、プラスチックゴミ削減をめざすバッグ
■本校の特色が伝わり、本校を知ってもらえるようなバッグ

担当職員が次の原案を生徒たちに提案し、生徒たちから意見を求めた。

コンセプトの方向が定まったので、次の段階として、バッグを購入してもらう「ターゲット」を決めることとした。

・中高生　・小学生　・お年寄り　・主婦　・限定しない（マルチ）

ターゲットについても様々な意見が出され、話し合いの結果このように決まった。

ターゲットを一つに絞るのではなく、
複数のターゲットを設定し、ターゲットごとにチームを編成して活動する。

また、役割分担についても話し合った。リーダーは必要か、どのような役割が必要かについて生徒たちの思いを出してもらった。「このプロジェクトの活動を多くの人たちに知ってもらうための工夫が必要だと思う」という意見が出され「広報係」を置くことを決めた。「インスタグラムを活用したらどうですか」「話し合いやつくっているところを動画にとってYouTubeに上げることならできます」などと、ここでも次から次へとアイディアが出てきた。次回は、コンセプトを決定することと、いよいよデザイン決めに入っていくことを確認してミーティングの２回目を終えた。

（4）コンセプト決め②

12 月 21 日（月）3 回目となるミーティングでは前回に続いてコンセプトについて意見交換をした。

・エコバッグにこだわる必要があるのだろうか。エコに制限されてしまうので、自由なデザインとするためにも「エコ」という言葉は入れない方がいい。
・エコに代わって「機能的な」と入れたららどうだろうか
・様々な使い道があるものにしたいので、ただの「バッグ」としたらろうか
・地球温暖化やプラゴミ問題だけに限るのではなく、地球環境全体のことを考える「SDGs」という言葉をいれたらどうか
・コンセプトは、読みやすく分かりやすいためにも端的な言葉の方がいい

今回も様々な思いや考え方が出され、生徒たちの「よりいいもの、納得のいくものを創りたい」という気持ちが十分に伝わってくる質の高い話し合いであった。

2回の意見交換を経てコンセプトが次のように決まった。

「ところで、SDGsってそもそも何ですか？教えてください」という質問が出された。予想された質問ではあるが、このような「純粋な問い」はとても貴重であるし、大事にしたい。職員が「こういうことです」と教えるのではなく、次回のミーティングまでに各自調べることとして、次回は「SDGsに関する研修」を実施することにした。

（5）チームごとのデザイン構成始まる

コンセプトが決まったので、次の行程である「デザイン決め」についての話し合いがスタートした。デザインについてはターゲットによって 3 つのチームを編成しチームごとにデザインを決めることにした。

■中高年をターゲットにするチーム
■お年寄りをターゲットにするチーム
■ターゲットを特に定めないチーム

デザインを考えていく上でのポイントについて三溝さんからアドバイスをいただいた。

〇チームの中でのコンセプトが必要となる。チームコンセプトを考えよう。
〇常にターゲットを意識しながら創っていくことが重要。
〇バッグを使うシーンをイメージしながらデザインしよう。
〇ネタ帳のようなものに、思いついたらとにかくどんどん描いていこう。

＊＊＊

現在、本プロジェクトはここまで進んでいる。自分たちの力で自分たちのバッグを作って売るという活動に集った生徒たちは8名。8名とも実に個性豊かな生徒たちである。自分の軸をしっ

かり持っており、それでいて、他者の考えも柔軟に取り入れたり、融合したりすることもできる生徒たちである。

この生徒たちが、今回のプロジェクトを通しながら、どのように成長・変化していくのか楽しみで仕方がない。

そして、今回、このような素晴らしいプロジェクトが実施できたのは、文科省の委託事業における地域ネットワーク委員会に北信帆布社長の福島さんが委員として参加したことがきっかけであった。話し合いを通して本校の生徒たちのことを知ってくれた福島社長さんからの提案で今回のプロジェクトがスタートした。改めて出会いの大切さを実感することができ、哲学者でもあり教育者であった森信三先生の言葉が思い出された。

人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に 縁は求めざるには生ぜず 内に求める心なくんば、たとえその人の面前にありとも ついに縁は生ずるに到らずと知るべし

可能性への挑戦「力が試された生徒会活動」

1　コロナ禍での文化祭

生徒会活動は、生徒たちが持っている可能性を見出し、伸ばすことができる絶好の場である。中でも生徒会最大行事である文化祭（以降「いばら祭」と表記）は、生徒たちが持っている独創性や豊かな発想を育て、試すことができる場である。

しかし、本年度の第 71 回いばら祭は、新型コロナウイルスの関係で計画立案の段階から困難を極めた。開催しても良いのか、開催するとしたらどのように感染対策を講ずるのか、検討しなくてはならないことが多々あったところに、4 月と 5 月が臨時休校となってしまった。しかも、本年度は校舎改築のための工事が 7 月から来年の 2 月まで行われており、会場の面でもさらに制限を受けることとなってしまった。生徒会最大のピンチであった。このピンチをチャンスに変えられるのか、新しい形のいばら祭を創り上げることができるのか、生徒会の力が試される一年となった。

6 月上旬、通常登校が始まると同時に生徒会役員会においていばら祭に関する話し合いがスタートした。そして、早々に「第 71 回いばら祭は開催したい」という要望を決め、職員会においても生徒会の意向を大事にすることが確認された。ただし、感染レベルが5に引き上がった場合は中止することも確認し、計画の立案に入った。

開催するに当たり基本方針を次のように決めた。

■感染予防係を新しく設け、可能な限りの感染予防を講ずる
■会場については、密を避けるために本校と第 2 校舎を使用する
■一般公開は中止する
■時間に余裕のある日程とする
■ファッションショーはいばら祭の中では行わない
■感染レベルによっては中止もあり得る

一般公開の中止を決めたが、保護者の来校をどうするかが大きな議題となった。学校側は「一家庭一人の来校を認める」という案を提示したが、生徒の中から「不安だ」という声が高まり、アンケートを取ることになった。その結果、特に受検や就職試験を控えた 3 年生から「万が一のことを考え、保護者の来校はやめてほしい」などという声を含め、30％以上の生徒からの反対があって、保護者の来校を中止することとなった。

一般公開の中止、保護者の来校も中止、会場は 2 か所などと「日程」「会場」「内容」などが例年と全く違うものになったため、これまでのいばら祭に関するデータなどを活かすことができずに、0から考えることが多くなった。このようなピンチを考えようによっては、これまでのいばら祭に捉われることなく、自分たちの発想で今年のいばら祭を開催できるんだとチャンスに考えようと役員会は前向きな姿勢であった。

実行委員会資料

第７１回いばら祭日程について
アンケートからの意見・要望

1　２年生も第２校舎で見たい（多数）

・３年生からも、２年だけ見られないのはかわいそうという声あり

2　いばら祭の様子を動画で撮って DVD にして保護者に渡したらどうか

？　広報係が専門生にも協力してもらい動画撮影はしたい

3　裏ミスは２回あるけど、衣装は変えた方がいいのですか

？　変えても同じでも良い

4　１年から土日の参加について

・土日にどのような仕事があるのか知りたいです

・土日に仕事がなければ、自由参加がいいと思います

5　専門生はいつ見学していいですか

6　ステージ発表のリハーサルの日程を考えてほしい

？　日程が確定してからリハーサル計画を立てる

7　生徒発表を３日間だけでなくて、２日間でいいのでは

8　生徒発表だけなら中止してもいいんじゃないか

例年と全く違ったいばら祭になるということで、生徒会役員と係同士の横の連携が大切になるので、連携がとれる体制を工夫してほしいという要望が係長からあり、生徒会役員＋正副係長＋担当職員をメンバーとした「第 71 回いばら祭実行委員会」を毎週のように開くこととした。この実行委員会において、いばら祭の方向性や全体像、各係進捗状況などを確認することとした。

この実行委員会のおかげで、各係の動きが見えやすくなったり、係同士の協力体制が取りやすくなった。例えば、係員が不足している看板づくりや記念品づくりの係長から応援要請があり、他の係から応援を出すことが出来たり、係だけで決めかねている事案を検討した。例えば販売係から、「飲食関係の販売をどうしたらよいか」という相談が出され、実行委員会として「今年は飲食に関する販売は中止しよう。その代わりとなるものを考えてほしい」と決めた。

新型コロナウイルスの関係で会場をど

うするかは大きな検討課題であったが、作品展示は本校の各教室を使い、ステージ発表は第 2 校舎の講堂を使うことが決まった。

もう一つの大きな検討課題である日程については、密を避け、みんなが平等に展示やステージ発表を見学できるための日程とするために修正を繰り返した結果、次のような日程の方針を決めた。

・いばら祭を 3 日間開催し、同じ内容を繰り返す。 ・開祭式、閉祭式はzoomで参加する。 ・見学できる日を学年ごとに決める。 ・見学のない日は、係活動以外の生徒は、自由登校とする。

新型コロナウイルスに対する感染予防に関しては、感染予防係が積極的に動き、感染予防のために様々な工夫を講じてくれた。受付係は、一般公開中止、保護者の来校も中止となったことで受付の仕事が激減したが、作品展示の仕事を率先して担当してくれて、限られた展示スペースを詳細な準備計画ですべての作品が見学しやすいように展示してくれた。販売係は、販売活動が出来なくなった代わりに、地域のお店の紹介を様々な工夫を凝らして、休憩の時間などを利用して楽しく紹介してくれた。

2 年生を育てたいという会長の願いもあり、今年度は正副係長に 2 年生 4 人に入ってもらったが、特に、係長の二人は非常によく動いてくれた。この経験を来年に生かしてもらいたい。

開催も危ぶまれた第 71 回いばら祭だったが、生徒たちの適材適所による活躍で、例年とは全く違ったものではあったが大いに盛り上がったいばら祭とすることができた。

特に、今年が最後となる3年生は、自ら盛り上げ自ら大いに楽しんでいた。普段は決して見ることのできない表情を、いばら祭という非日常的な場でたくさん発見することができた。「え？あの生徒がそんなことするの？」「すごい！こんなことできるんだ」と新たな発見が随所に見られた。まさしく、可能性を見出し、可能性に挑戦した「第 71 回いばら祭」であった。

＊　＊　＊　＊

生徒会の顧問は、今年の第71回いばら祭について、掲載はされなかったが次のように地元新聞に投稿した。

『スター誕生』というテレビ番組をご存じの方はいると思う。萩本欽一さんの司会で、山口百恵・桜田淳子・森昌子の「中三トリオ」など大勢のスターを世に輩出した伝説的なテレビ番組である。

私が勤務している県内唯一の専修学校である豊野高等専修学校で、先日、第71回いばら祭という文化祭が行われた。新型コロナウイルスの関係で一時は実施も危ぶまれたが、一般公開や保護者の見学を中止にしたり、換気の徹底や三密を回避するために、生徒たちは様々な工夫を施したりして何とか実施することができた。

本校に通う生徒たちの中には、中学校時代思うように登校できなかったり、集団で動くことが苦手だったりする生徒が多い。そのため、文化祭や修学旅行、クラスマッチなどの行事への参

加の経験や、人前で歌ったり、踊ったり、話したりするというステージ発表の経験が少ない生徒も多い。それでも、今年もまたいばら祭は大いに盛り上がった。「え？〇〇さんがそんなことするの？」「〇〇さんってそういうことできるんだ」「〇〇さんがそんなキャラだとは全然思っていなかった」生徒たちの新たな一面を知ることができた。これまでに見ることができなかった思いもよらない姿や声や動きを発見できたいばら祭となった。

生徒たちの頑張りに刺激されて私も「裏ミス」というコーナーに出演した。裏ミスとは男性が女装を、女性が男装してパフォーマンスを披露するというかなり刺激的なコーナーである。私は女装し化粧もしてもらって「プリティ」という名前で同僚二人と寸劇を披露したが、結構うけていたように思う。こういうときは、演ずる側だけでなく見る側の盛り上げが非常に重要である。女装や男装する生徒たちの中にも新たな発見はあったが、客席の中で盛り上げ上手な生徒たちを発見することもできた。まさしく、次から次へと様々な新しいスターが誕生したのである。

今年のいばら祭を見ながら私は伝説のテレビ番組『スタ誕』を思い出していた。

2　クリスマス会をzoomで開催

「今年は、全校が集まることができなくて、他学年との交流の場がほとんどなかったので、最後に全校で楽しめる企画をやりたい」という提案が生徒会役員から出され、12 月 25 日（金）今年最後の登校日にクリスマス会を行った。

全校が集まることができないのでzoomを使って実施することを決めた。zoomという機能は、今では生徒たちにとって身近な存在になりつつある。

新型コロナウイルス感染状況によって、再び休校にしなくてはならないこともあり得ることを想定して、登校日において生徒は登校せずに自宅でzoomで授業を受ける「zoomデイ」を先日経験していた。この経験のおかげで「全校が集まらなくてもzoomを使えばレクレーションができるのでは」という発想につながったと思われる。

当日は、情報の先生方にもサポートしていただきながら、zoomによる「大ビンゴ大会」を行った。会長はメイン会場のパソコンの前に座って数字を伝えながら、全校に楽しんでもらいたいと場を盛り上げるコメントを発するなどして工夫した。会場は、「学年や学級の枠を超えて交流したい」という願いの元、全校生徒にくじ引きをしてもらい8つの教室に、学年や学級がバラバラになって集まった。情報コースの生徒たちのパソコンを使いながら画面を共有した。戸惑うのではないかと思われたが、準備は意外とスムーズに進み、全校が集まらなくても、一体感のようなものを感ずることができた。

今回のzoomによるクリスマス会の実施は、これからの生徒会活動や学校行事などを変えていくきっかけになるかもしれない。生徒総会、始業式、校長講話などはこれまで校内放送で行っていたが、zoomを使えば顔が見えて、少しでも対面に近い状態となり思いを伝えやすくなる。

zoomによる今回の生徒会主催のクリスマス会は、価値ある挑戦となった。

可能性への挑戦「変わりたい！と挑む生徒会選挙」

12月に入ると生徒会役員改選に関する動きが始まり、中旬には立候補者が出そろう。例年、「意外」と表現してもいいと思うが、多くの生徒たちが自分の意思で立候補する。立候補者の顔ぶれを見て「あの生徒が！」と驚かされることもある。

今年は生徒会役員候補に1年生1名、2年生7名の計8名が立候補した。8名のうち、7名が中学時代に不登校であったり、中間教室へ通室していたり、相談室登校だったりした生徒たちである。中学校の先生たちにはこの姿がどのように写るのであろうか。「まさか生徒会役員に立候補するとは」と驚くのではないだろうか。

演説のために教室訪問に来た生徒たちの多くが、立候補した理由として「自分を変えるために立候補しました」と訴える。

約2週間にわたる選挙戦になるが、立候補した生徒たちが戦うのは同じ役職に立候補している生徒ではない。彼らが戦いを挑むのは自分自身なのである。

生徒会役員をやりきることで「自分は変われる」と考えて立候補する生徒が多い。なぜ、そう考えるのだろうか。私が思うには、そういう先輩、つまり生徒会の役員をやることによって良い方向に変わった先輩たちを見ているからではないだろうか。身近な先輩にそういう先輩がいるからではないだろうか。そして、手本となったその先輩もまた先輩の姿を見て立候補したのではないだろうか。そう考えると、この生徒会選挙という場は、自らの可能性へ挑戦する場であり、この挑戦は、一つの伝統となっているように思えるのである。

＊　＊　＊　＊　＊

今年度生徒会の会計係を担当した0生は、1年前の立候補する際「自分は計算が苦手です。」とはっきり言いのけた。「そんな自分を変えたくて会計係に立候補しました」と演説の中で訴えていた。真面目で人当たりの良い0生ではあるが、本人が言うように確かに計算などの数学が苦手である。当選後、最初の仕事は予算書の作成であったが、案の定苦労した。前会計係の先輩からの引き継ぎはあったものの、「予算書」とはどういうものかという意味を理解することから始まった。事務の先生からの指導や支援のもと予算書作りに没頭する日々が続いた。すると、0生から「これまでのやり方では不明瞭なことが多いので、会計のやり方を変更したいのですがいいですか」という提案があった。その後も、0生はこれまでのやり方を改善していき、会計係としての仕事に誠心誠意取り組んだ。

そんな0生が1年間を振り返ったとき「本当に自分は変わったと思う。計算にビビらなくなっただけでなくて、会計の仕事を通していろいろな人と話をすることができたし、いい方向に改善することもできた。自分にこんなことができる力があるなんて思いもよらなかった」と笑顔で本当にうれしそうに語ってくれた。

＊　＊　＊　＊　＊

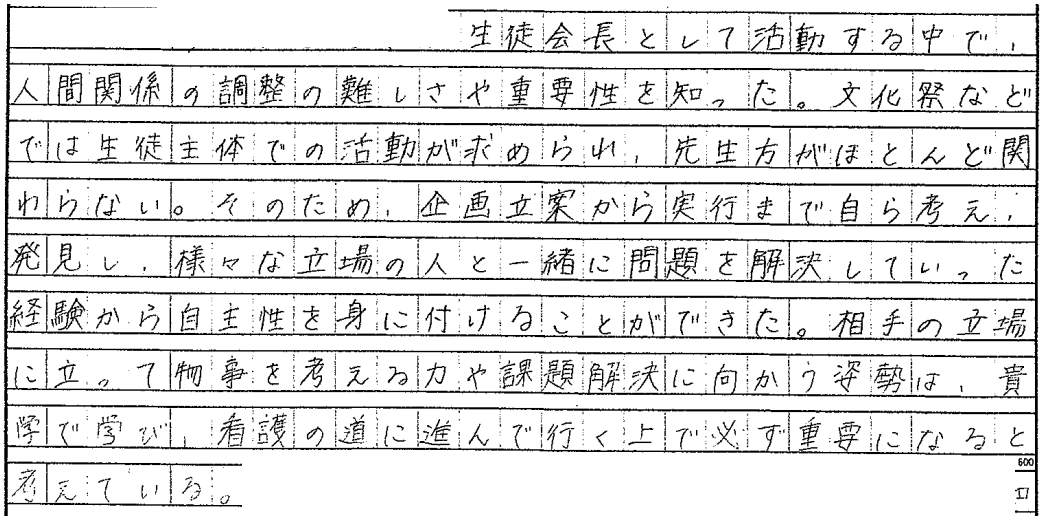
今年度副会長だったH生もまた立候補する際「自分は人前で話をすることが苦手です。副会長になって消極的な自分を変えたいです」と訴えた。とても真面目でおとなしく人当たりの優し

い性格。でも、声が小さくて教室の中でも存在感が薄いH生である。反面、生徒会長は、ハキハキと物事を言うことができ、自己主張がやや強引とも思えることがあるため、当選した当時は、この二人のコンビで大丈夫だろうかと心配したが、文化祭では「裏ミス」というコーナーを任され様々な工夫をしながら文化祭を大いに盛り上げた。H生自身も裏ミスに参加したりダンスをしたりと、これまでに見ることができなかったH生の姿に驚かされた。

「苦しいことは結構あったけど、でも周りの人たちに支えられながら何とかやり抜くことができました。人前で話すことも苦にならなくなりました。おかげで自信になりました」と振り返った。H生は今年度の生徒会選挙において、後輩である副会長候補の応援責任者に名乗り出て、教室訪問に同行して応援演説をしている。

＊　＊　＊　＊　＊

生徒会長であったS生は、大学入試の際に提出する「自己推薦書」に次のように記した。



生徒会長として活動する中で、人間関係の調整の難しさや重要性を知った。文化祭などでは生徒主体での活動が求められ、先生方がほとんど関わらない。そのため、企画立案から実行まで自ら考え、発見し、様々な立場の人と一緒に問題を解決していった経験から自主性を身に付けることができた。相手の立場に立って物事を考える力や課題解決に向かう姿勢は、貴学で学び、看護の道に進んで行く上で必ず重要になると考えている。

母校の進路学習

「先輩の話を聞く会」

に参加して

飯綱中学校

卒業生

３Ａさやかさん

３Ｂあおいさん

日時

令和２年12月18日金曜日

15：25～16：30

支援棟オープンスペースにて

支援級の後輩たちへ学校紹介と成長できている自分

勉強(特に国数英)

さやか）中学の時、国語は原級でテストも受けていた。週2,3日は半日しか学校に行ってなくて、勉強は本当にしてなかったけど自分は変わりたくてＡ組を選択した。でも今は皆勤賞です！

あおい）中学の頃はずっとイラストを描いていた。ほぼ原級で過ごしていたがＢ組を選択した。

通いやすい

さ）この学校は小学校の勉強からも戻って数学も基礎から学べます。イチから教えてくれたりする事があります

あ）牟礼駅から１つ。駅からすぐ学校なので通いやすいです。

中学と違うところ

お昼の過ごし方が大きく違う、単位のこと、自由度、時刻表は読めるように、クラス編成、授業時間と休憩時間、ＡとＢの違い、アルバイトOK

入試のとき

さ）コミュニケーションを大事にしたほうがいい小６の勉強は絶対！

あおい）自分は作品を持参してアピールした

豊専に決めた理由

参加生徒

中３～１年の６名

保護者

１名

在校生

１名

聴講されていた先生

中山先生、粟津原先生

三浦先生、宮崎先生

母校の先生方より

とても中学生にわかりやすい説明で中学生もしっかり理解できたと思います。

自分の絵を持って入試を受けたとは知らなかった。自分を入学前にアピールしたかったんじゃないかな、と思いました。

（葵さんは豊専で実際に描いているスケッチブックを持参して中学生に披露してくれました）

あ）イラストを描きたかった、キャラクターを描くのが好きだったけどデッサンや人物画のチカラもつかたかったから。

高校生活について(中３生より)

Q.入学して初めて会った人と、どうやってコミュニケーションを取った？

A.　さ）はじめまして「中学はどこから？」など他愛もない話が楽しい。人間関係複雑だったり仲が良い人など変わった部分もある。

A.　あ）友達から声を掛けてもらった。自分の趣味や共通の話題がいい

Q 楽しいことは？A.友達と話したり友達と過ごすこと修学旅行もいばら祭

入学したときと今の進路希望は同じ？

さ）入学した頃は農業系だったけど母のデイサービスに２年の時、職場体験に行ってその分野に興味を持って情報から介護コースに変更した。

あ）ずっと描くだけだったけど、色んな人に見てほしいとか進学してゲームや自分のデザインを商品化してみたくて美術系の専門学校に進学します。

中学生に伝えたいこと

○板書は練習しておいたほうがいい（さ）

○最初はＢ組と思ったけど「変わってやろう」と思ったし、朝から学校に通いたいと思ってＡ組を選択した（さ）

○最初は喋れなかった。でもはっちゃけてやろうと思った（あ）

中学生や私たちの前で話せることだけでもすごいのに今の自分の思いや過去の自分もふり返って伝えられるなんてすごいですね。

※話したあと、生徒たちに手作りのお土産をもらい、みなさんに囲まれしばらく談笑しているおふたりでした。

（同行職員より）

伝え方がふたりとも「できた」「よかった」など「ポジティブ視点」で発信できていた。

声も大きく伝える事ができていた。

豊野高等専修学校の生の声として、学校や生徒像のアプローチができた。

生徒からの質問場面では目を見て、聴く姿勢を保ちつつも頷き、笑顔で聴く余裕もできていたため生徒さん達は安心して質問できたのだと思う。

○自分は中学の時ダメダメだったけど、そんな自分でもやれている（さ）

～可能性の挑戦できる機会提供を～

今回卒業生として母校の支援級在校生・保護者・先生方に学校紹介と中学からの自分のことを話す機会をもらった半面「できる・変われる」を表明した時間だった。生徒自身が自信をもって自己成長の姿や取り組みを説明できたことは彼女たちにとって非常に多くの挑戦の一つと言える。

ぜひ、今後他校でもこの様な機会を提供いただき、多くの在校生や保護者に希望を与えること、自己成長できることを多くの方に伝えたい。